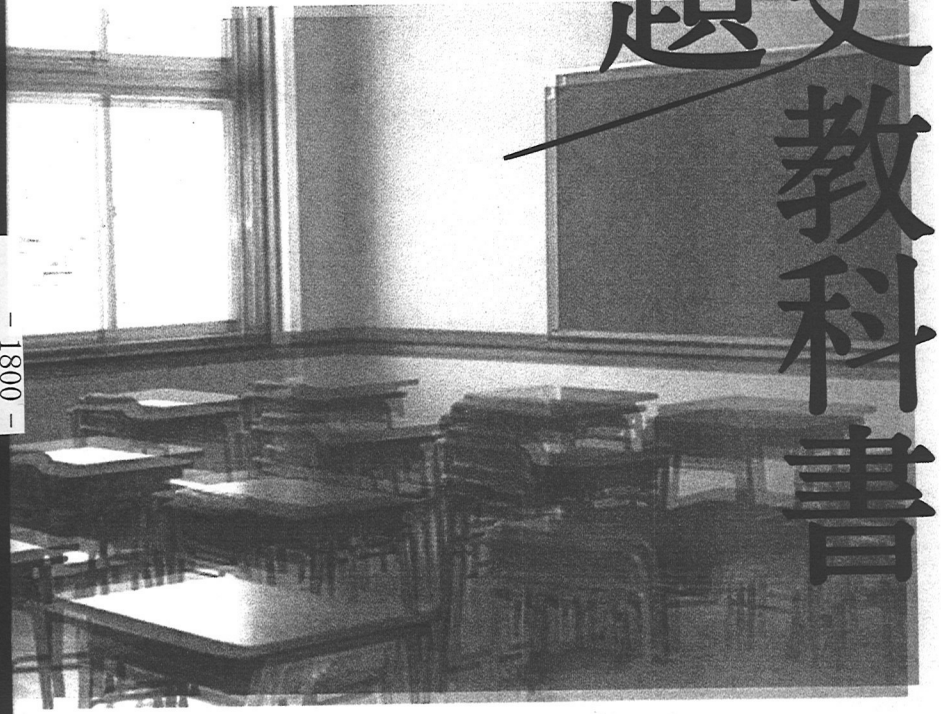
歴史教科書問題

道標Ⅲ

和田憲雄



長崎出版

歴史教科書問題

和田憲雄

長崎出版

9784860952044

1920021028007

ISBN978-4-86095-204-4

C0021 ¥2800E

定価：本体2800円＋税

長崎出版

- 1800 -

No. 489 (1/11)

つの生命〟を保全しようとする関係のことである。〝命の相互補完性〟ないし〝命の相互補完装置〟と表現してもよく、「多様性」＝「命の相互補完装置」＝「危険分散装置」という自然の摂理が、私たち一人ひとりにつねに作用していることを意味する。要するに、「種」絶滅回避のために自然が自他の生命に組み込んだ「種の保全装置」のことである。

道標Ⅰ「自殺のない国を目指して」（仮題）で提言した、唐津釜山間「アジア海底鉄道トンネル」構想実現のためには、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国との協同を欠かすことはできない。朝鮮半島とわが国の過去の相関的歴史を正確に認識することは、「アジア海底鉄道トンネル」完成による日朝韓三国新時代を築くにあたり不可欠である。第二章「日本の原影Ⅱ」で、日露開戦前夜の東北アジア情勢や日本経済が直面していた課題などに言及し、日露開戦理由の真実および日露戦争の核心にせまった。日露戦争の真の姿にふれることは、日本・韓国・北朝鮮三国間に横たわる諸問題の源を見きわめる手助けともなるはずである。「世界的植民地化時代」におきた「日露戦争」をあるがままみることで、その当時の大韓帝国がどのような過程をへて日本により保護国・植民地化されたか、そしてその国民がどれほどの辛酸をなめ苦汁を味わったかを理解する一助にもなると思われる。

日露戦争について扶桑社版歴史教科書の改訂版（二〇〇五年三月検定合格、二〇〇六年春から四年間使用）は旧版も含めて、その真実の姿を正確に生徒に伝えているのだろうか。その答えは、「否」であった。他社が発行した歴史教科書の記述と比較照合したが、その差は歴然としたものだった。日露戦争の真因がぼかされており、本質がすり替えられているといってよい。ロシアの軍事的脅威のみを強調しバルチック艦隊撃滅を褒めたたえる姿勢に対して、ロシア政府はいつまでも座視してはいないのではないか。不況にあった日本経済の活路を朝鮮半島に求めようとした経済的要因に一言もふれず、しかも満州と朝鮮半島をそれぞれロシアと日本の独占的勢力下に置こうとする「満韓交換論」の具体性に全く欠けた記述では、自国資本主義経済発展のため植民地争奪戦に国家の命運をかけた点に日露戦争の核心があった歴史事実にたどり着くことはできない。すなわち、この「歴史教科書」は過去を真正面から見すえて、歴史と真実を語り合おうとしていないのである。この記述姿勢は、「東南アジア侵攻」にも貫かれている。東南アジア侵攻と日米戦惨敗の結果生じた戦後の歴史事実を強調することによって、開戦にいたった理由をぼかし戦争の「大義」を捻出している。旧版と比較して改訂版は、その傾向をいっそう強めている。

道標Ⅱ第三章の一「原爆投下のアメリカの大儀――その偽装的表現と欺瞞性が招きいれ

No. 489 (2/11)

していただければと思っている。

二一世紀になっても東アジアに跳梁する「帝国の幻想」、そして戦争という国家相互人命殺傷行為で紛争を解決しようとする旧態依然の軍事的国家観は、人間を根絶やしにする「核」という絶滅兵器使用の誘惑と脅威から決して逃れることはできない。軍事力をもって紛争を抑止する、あるいは解決するというその価値観、すなわち「国家の暴力性」はさきにふれたように、いまだ進化途上にある「人間の不完全性」から生じる「ヒトの暴力性」を根源とする発想である。自由民主党新憲法草案第九条の二第一項は「自衛軍」の保持を明記、明治以来再び日本軍を制度的に認めて、アメリカやアメリカを機軸とする軍事同盟との「集団的自衛権」行使を可能にし世界の紛争に軍事介入しようとするが、これも同じ発想にもとづく。「自衛」という偽装的美名を「軍」に冠しようと冠しまいが、「軍」は軍隊であれば当然もつ「交戦権」の存在を前提とし、その「交戦権」そのものが、「ヒトの暴力性」の存在とその発露を不可欠としているからである。

第三章の一で「日本核武装論」の本質を追及したが、「日本核武装論」も根を同一にする。人間が不完全であり、人間が「ヒト」の暴力性を本能的に持っている以上、日本核武装論者が説く「相互確証破壊」状況作出による安全保障は虚構である。核を持とうと持つまいが、現在の人間はその不完全性のゆえに「相互殺傷行為」に奔る。そのとき、

「核」があっても絶対に使わない、という保証はどこにもない。「核」の暴発はない、とも断言できない。また、宗教上の確信を根本動機とする「殉教精神」にもとづく「自爆攻撃」は、国家教育によって培養された「七生報国」などの精神を背景とした日米戦下の「特攻」を、攻撃主体たる「自爆者」個人に要求される決断力・持久力などの精神面や実行力・成功率などの達成面においてはるかに上まわると思われる。この「自爆」の手段に「核」は使用されない、という保障もどこにもない。米ソが核戦争の手前までいった一九六二年一〇月の「キューバ危機」で、当時のソ連はキューバに核弾頭九八発を持ち込んだ。一発の核弾頭の威力は広島型原爆の約一六〇倍から約四五倍であり、実際に核兵器が使われた場合、アメリカの死者は最低でも八千万人に達しただろうとの調査が報告されている（朝日新聞二〇〇六年一一月一九日朝刊一三版参照）。軍事的圧力や軍事力行使を前提とする外交戦略は破綻し、戦争という手段で国家の雌雄を決する時代はすでに終わっている。そのことを、この事実は告げているのではないか。

私たちは「ヒトという種」を保全するため、EUの原点たる「アルザス・ロレーヌ」を東アジアに出来させることなく「ヒトの暴力性」を超克して「帝国の幻想」を打破する、今まさにその課題に直面しているのではないだろうか。道標Ⅰで提言した日韓を結ぶ唐津・釜山間「アジア海底鉄道トンネル」や、道標Ⅱ提言のアジアや世界の非核武装諸国と

の「非核共同体」建設は、その課題にたいする試答である。

なお、文中の個人名は敬称を省略した。

四年にわたった米国ロースクール留学は筆者に「国家」を覚醒させ、さらに日本列島をユーラシア大陸に接続する佐賀県唐津・韓国釜山間「アジア海底鉄道トンネル」建設の必要性を痛感させた。その意味で米国留学は意味深き転換点となった。中央大学の小林昇名誉教授、前総長・外間寛名誉教授、住吉博元法学部教授・元司法試験考査委員、そして大学時代同級生であった星野智法学部教授各氏の推薦なくして、米国留学は到底あり得なかった。ここに深き感謝の念を明らかにし、この小著をもって帰国報告としたい。

また、武術・武道修行時代から留学時代そして今日この日にいたるまで、人生の難局にあたり公私にわたって支えつづけて下さった医学博士・村磯旺嗣氏とご夫人・綾子様の御助力に対し心から深く深く謝意を表したい。

作家・長尾一郎氏と長崎出版代表取締役・辻晋泰氏には、本書の刊行につき決定的な御尽力を賜った。ここにあわせて心より御礼申し上げる次第である。さらに、広瀬誓子氏をはじめ校正段階から本書の完成に必要なすべての仕事と献身的な努力を惜しまれなかった編集部の方がたに対して、ここに記して感謝の意を表したい。

第一章 日本の原影 I

一　世界の英雄、天武・持統両朝

——真の愛国心と建国一三〇〇年の歴史を考える

西暦六六〇年、唐（六一八～九〇七）・新羅（四世紀の半ば頃～九三五）の連合軍によって滅ぼされた朝鮮半島南西部の百済（くだら）（四世紀の半ば頃～六六〇）では、その後も豪族が兵をあつめて抵抗をつづけ、倭国に援軍をもとめていた。斉明（さいめい）大王（位六五五～六六一）はこれに応じ派兵したが、倭軍・百済復興軍は、西暦六六三年八月、白村江（白江）において唐・新羅連合軍に大敗を喫した。

この大敗をうけて大和朝廷は「国」防の強化をはかるため、対馬から大和にいたる西日本の各地に防衛施設（山城）を構築し、大宰府の北に水城（みずき）を築いたほか、対馬・壱岐・筑紫に防人を配置し、対馬海峡（西水道）を防衛線（国境）と定めて新羅と対峙した。さら

三月に検定合格し二〇〇六年春から使用されている教科書には、その改訂版と清水書院発行の中学校社会科教科書『歴史改訂版』を資料として使用する。便宜上それらの教科書を、それぞれF、FR、SRとする（二〇〇二年春から使用された扶桑社中学社会科用歴史教科書〈F〉と、二〇〇一年六月一〇日に発行されたその市販本の初版は、本体の内容とページ構成において完全に一致する。改訂版〈FR〉とその市販本も本体の内容とページ構成において一致する）。第三章の三で、「扶桑社版歴史教科書の最大の特質は〝戦争に恐怖を抱かない心の誘導的育醸ならびに戦争の有用性を認容する心の誘導的育醸〟を確定的故意または未必的故意により、または結果的に招いているところにある」と述べた。旧版Fを学んだ生徒たちは二〇〇七年現在、一七歳から二〇歳になっている。戦争に対してどのような想いを抱いていることだろうか。アンケート〈仏 enquête〉（「調査」）などの調査回答による検証や、その父兄による直接の聞き取り調査の実施も視野に入れるべきだろう。

なお、「つくる会」・扶桑社の教科書執筆人とその指導・協賛集団には、それなりに日本を思う〝深慮〟があると思われる。「日露戦争の本質」の末節でその深慮などについてふれた。しかし、その深慮が「天皇・皇室制度」（の政治的・心理的活用）をも考慮した「国家単位」ないし「自国単位」の思考論理を基底としているものであるとすれば、その〝深慮の成就〟は不可避的に「他国家の利益」と衝突し、再度日本国の解体への可能性を胚胎

する。このことは、政治哲学者アラン・ブロサ〈Alain Brossat〉（一九四六～）パリ第八大学教授が、「覇権をどちらが握るかという〝帝国の幻想〟が東アジアでは死んで」いないとの指摘からも明らかである（→第三章の九「国益と祖国について考える」参照）。また、深慮の成就のためには、「大権中心主義憲法の制定」・「国家目標成就のための国定教育」がかつて世界史に類を見ない功を奏したように、国民の価値観を一元的にまとめあげて、いわゆる「単一精神統一体」＝「単一精神支配体制」を作出せねばならない。そうだとすれば、「つくる会」とその指導・協賛集団による深慮の成就は、終局的に「天皇・皇室制度」をも危うくするものではないだろうか。そのような深慮を断腸の思いで棄て、将来日本が「歴史的世界文明国」の地位を確実に築くため、核廃絶の確かな一歩となる「非核アジア共同体」・「非核世界共同体」および、日本の唐津と韓国の釜山を結ぶ海底鉄道トンネル「アジアトンネル」の建設にそのエネルギーを至急にシフトすべきである（→道標Ⅰの「提言Ⅰ」、道標Ⅱの「提言Ⅱ」を参照されたい）。この「アジアトンネル」構想は道標Ⅰ『自殺のない国をめざして』（仮題）の主題である。ここでその理念についてだけ引用しておきたい。

わが国は、古代においては隋・唐の国へ、近代幕末期にあっては西欧米諸国へと国政

改革のために必要な新しい知識をもとめて留学生や使節団を諸外国に派遣してきた。この構図は日米戦に惨敗した戦後においても、一部のエリートを留学生として米国に多数派遣してきた例にみられるように全く変わってはいない。要するに、時代の変遷にともなう世界情勢の大きな変化の波が日本におしよせて初めて、それに対応するため国外に新知識をもとめその知見によって、国内の体制を変革していくという、いわば〝受動変革〟のくり返しである。これが、循環的に訪れる「混沌→頂点→混沌」の基本要因となってはいないだろうか。

第五節で触れたように、とくに日本農耕型社会に特有な歴史的価値規範やシステムを基礎にして、一六三五年の「寛永一二年五月二八日の禁令」による「心理的意味における環海」出現以来、社会全般に堅固に醸成されていった「世間」の論理は、「受動変革」期において留学生らがその地で身につけてきた改革精神、あるいは世界に通用する多様な「ものの考え方」を、時の流れとともに埋没させすべて飲み込んでしまうのではないだろうか。身に染みこんでいた日本社会の価値基準、すなわち「世間の論理」と葛藤・呻吟のすえ、自己のものとした国際的感覚——多様な精神——の「世間」への埋没である。「数の論理」つまり「多勢に無勢」からくるこの現象は、二一世紀になった現在でもくり返し発生していると思われる。

そうであれば、この「世間の論理」と「受動変革」を打破することが、わが国を特徴づける「混沌→頂点→混沌」という歴史的連鎖に終止符をうつことになるはずである。そのためには、海難事故のおそれのある「物理的意味における環海」、および「心理的意味における環海」を超え、「政治的意味における環海」を超えることで、〝環海による呪縛〟から弧状列島を解放するよりほかに方法はないのである。すなわち、ユーラシア大陸とのアクセスを鉄路で確保し日本の津々浦々から普段着での常時往来を可能とすることにより、「草の根」からの「多様性」との不断の接触をはかる以外には方法はないと思われる（船舶・航空機による、常時不断の「草の根」段階からの往来にはおのずと限界がある）。そのような常態的接触によって、「世間の論理」がまかりとおる社会は強烈に揺さぶられ「個の精神」が覚醒される。そして、世界の趨勢と未来を読みとった市民が日本の国政を積極的に変革することによって、「受動変革」を〝能動変革〟へと自然に転換するはずである。そのとき「黒船の呪縛」という言葉は遠い過去の死語になるはずだ。その手段はやはり大韓民国との協同による「アジア海底鉄道トンネル」以外にはない（道標I第二章提言I「唐津・釜山間『アジア海底鉄道トンネル』建設構想」）。

鮮半島において何があったのか。日本とロシアはそこにおいて何を争ったのか。なぜ日本は日中戦争に突入したのか。なぜ東南アジアに侵攻し、連合国（＝ＡＢＣＤ包囲網とほぼ同義）と戦火を交えたのか。この素朴な疑問に客観的に応じてくれる歴史事実や戦争の真実を、各自が正確に把握することによってのみ、韓国・北朝鮮・中国・東南アジア諸国の人々の〝日本に対する心〟に接近し、その痛みを共有することが可能となる。そして、その「こころ」の共有によってのみ、「人間の安全保障」のための「非核アジア共同体」構想実現や（↓道標Ⅱの提言）、ユーラシア大陸と日本を海底鉄道トンネルで連結する日韓の「アジアトンネル」建設実現への道が開かれると思われる。さらに、読みすすむにつれて、今日の日本が抱えている内外の諸問題の淵源に、読者の方々は徐々にだが確実にたどり着く。淵源を認識できれば、日本の未来像は、読者各自の「智慧の刃」の創造行為によって自由に描かれることが可能となるはずだ。日本国の現在の「主権保持者」、「権力者」、「主権行使者」は、あなた方読者一人ひとりである。

二　日本に「四面楚歌」を招く「つくる会」による日露開戦の理由
――露国民は納得するか

まず、日露戦争の「勝利」からすすめよう。

ＳＲ　日清戦争後の朝鮮では、三国干渉の結果、改革を指導していた日本の権威は弱くなり、ロシアの勢力が強まった。いっぽう、清では、ヨーロッパの強国が争って港湾都市を租借し、鉄道建設や鉱山開発の権利を手にいれた。ロシアはシベリア鉄道の完成にさきだって、支線を満州（中国東北部）を通って日本海岸まで引き、さらにその途中から大連まで南下させる権利を手に入れた。一九〇〇年には中国民衆が西洋勢力を排斥しようと義和団運動をおこして失敗したが、そののちロシアは満州に大軍をおくようになった。日本は朝鮮（韓国）もロシアに奪われるのではないかと心配しはじめた。このため日本は、日英同盟（一九〇二）をむすんでロシアをけん制するいっぽう、ロシアに対して、満州をロシア、韓国を日本の勢力圏にしようと提案した。ロシアがこれを拒むと、一九〇四年、日本は開戦にふみきった。……日露戦争は、日本

の暮らしを根底から脅かすのだ」「一九八四年にノーベル平和賞を受けた南アフリカのツツ元大主教は、『皆が幸せになるまで、誰も幸せになれない』との信念を語っている」（毎日新聞二〇〇六年三月一〇日朝刊一一版『記者の目』参照）。時実教授はこの南アフリカ共和国の惨たんたる現状、そしてアメリカの内なる経済政策と外における軍事力をちらつかせた経済・資源世界戦略のありのままの姿を約四〇年前に、すでに示唆していたのではないか。この「征服欲」・「殺しの心」・「そねみ」・「嫉妬心」という「ヒト〈Homo sapiens sapiens〉の心」を、この節の冒頭でふれた「他者の苦痛や悲劇を自己のものとして共感しうる心」という「人間〈human〉の慈悲の心〈humane〉」で止揚することが、私たち日本人をはじめとして人間に突きつけられた最大の課題なのである。

序文において、「一体化すべき自己と他者に民族や国家を含めていくことが、国家対国家という闘争構図による『自他の命の喪失』を逆に防ぐことにつながっていくのではないだろうか。その意味で『自己』と『他者』という言葉は私たち個人から民族や国家をも含む広い概念へと発展する」、と語った。しかも、「命」に人種・民族による軽重の差などあるはずはない。そこで、「他者」を「他民族」・「他国家」に拡大し、「自己」を「自分の民族」・「自分の国家」に拡げて、たとえば、「『他民族』の苦痛や悲劇を『自分の民族』のものとして共感しうる心」と置き換えてみよう。この「他民族の苦痛や悲劇を自分の民族の

ものとして共感しうる心」が各自の心に醸成されはじめたとき、はじめて民族や国家主権を単位とする考え方から脱却する道にたどりつくことができるのではないだろうか。これが、戦争廃絶や核廃絶のためのまずは前提条件となると思われる。

「国家単位の思考様式からの脱却」のためには、「他国家」の実像にこの五感でじかに接触する以外には最も有効な手だてはない。我が国のような四面環海に閉ざされた地理的・社会的・教育的環境から離れて、開かれた異質な環境に身をおき、「自分の国家」すなわち自国を外から見つめ直すことである。その実践によって、逆に自国の異質性に気付くはずだ。道標Ⅰで提言した、唐津釜山間「アジア海底鉄道トンネル」は、「自己」をその異質な環境へ普段着のまま、抵抗なく不断にいざなう、すべての人のための機会均等の交通手段である。

国単位によって縛られていた思考から脱却できたとき、新たな創造行為がはじまる。**「異質性」を体感し、「異質性」とは実は相対的なもの**であった、とその正体に気づいた人達は、「人間の命の尊厳」を根本とする価値観を互いに共有できる、世界中の〝**人間の連帯**〟による、世界中の人との〝**こころのネットワーク**〟を築きはじめるだろう。

そのような「智慧の刃」の力による創造行為から、世界に通用する多様な価値観をもつ、すぐれた人物が必然的に日本国に生まれてくると信じている。

体制の実現にむけた地道な外交努力と平行して、わが国は独自の共同体構想として「非核アジア共同体」・「非核世界共同体」の構築に向けて地歩を固めながら一歩ずつ前進すべきであることについてもすでに明らかにした（道標Ⅱ第三章「核廃絶への道」参照）。

また、日本とユーラシア大陸を鉄道で連結する唐津釜山間海底トンネル「アジアトンネル」は鉄路だけで、韓国・北朝鮮を経由して西はイギリス、南はヴェトナムまで人的・物的流動を可能にし、不可避的に北朝鮮にも膨大な経済的豊かさをもたらす（道標Ⅰ提言Ⅰ）。この期待される経済的効果は金正日体制のかたくなな挑発的軍事路線と核保有に変化を与えるのでないかと思われる。この「アジアトンネル」完成のための技術的課題などについては、すでに日本の特定非営利活動法人（ＮＰＯ）「日韓トンネル協会」により着々と調査研究がすすめられており、三菱重工業と熊谷組は比較的固く深い地盤を掘る山岳工法と海底など軟弱で浅い地盤用のシールド工法それぞれの長所を統合した「ＫＭ21ＴＭ」という新トンネル工法をすでに開発している。硬軟両方のさまざまな地層に一台の掘削機で対応でき、従来より長距離でも完全機械化で掘り進むことができるトンネル工法である。

あとは日韓両国の世論の形成と日韓両国政府の合意をまつだけとなっているのである。北朝鮮核問題の解決をまつことなく、日韓両国政府がこの海底トンネル建設プロジェクト

実施にむけた合意を早期に発信することが、北朝鮮の従来の自滅的外交政策に微妙な変化をもたらすのではないだろうか。いずれにしても、挑発に乗ることなく、またこれを奇禍として「いつか来た道」に引き返すことなく、「自他共存」への道をねばり強く模索すべきである。

ここでくり返しふれるが、「自他共存」や「自他一体の精神」の「自己」と「他者」は相互にそれぞれの存在の前提条件となっており、「自他共存」とは、そういう意味合いを持つ言葉である。「自他」から成る「多様性」とは、種維持のため相互に生命を補完・保全しあう「危険分散装置＝命の相互補完装置」であることもくり返し意識しておきたい。「自他」が分裂し、「自」と「他」が相争うとき「自他」は滅びにいたること、そして「自」・「他」は私たち「個」だけではなく、民族や国家をもふくむ幅の広い言葉であることについてもすでに言及した。

さきに、「真の国益とは、この『武（道）の精神』ならびに危険分散装置＝命の相互補完装置などから導かれる『自他一体の精神』が要請する〝自他共存〟を大前提にするものなのである。」と述べた。「真の国益」が世界を抗争状態から救うため、あるいはその状況に陥らせないための「自他共存」を大前提にするものであるなら、この「自他一体の精神」を涵養する「武（道）の精神」を世界に普及させることこそが国益であるといえるだ

る方々が、この事実をどれだけ把握していることだろうか。

志ある方々は、この真剣形武術の世界に一度は身をおきその片鱗にふれることによって、その精神をあらゆることに活かすことができるはずである。また、真剣形武術ではない竹刀剣道の世界にあっても、太刀形七本・小太刀形三本からなる真剣形の日本剣道形が制定されている。わずか一〇本からなるこの剣道形は、応用することによって一〇〇本近い技を練習することも可能であるといわれている。この形は北辰一刀流・神道無念流・直心影流・小野派一刀流など日本全国の諸流派のすぐれた技を集約したものであり、この形の原本である帝国剣道形（一九一二〈大正元〉年一〇月完成）の原案・草案作成過程において、各流派の一流の剣客たちは自分の伝える流派の形を少しでも取り入れて後世に残すため命がけであり、自分の主張がいれられないときは流派の面目にかけて、刺しちがえて死ぬほどの覚悟であったと伝えられている。先人たちの必死の想いと英智が凝縮された珠玉の真剣形である。この日本剣道形の理合を反復練習することによっても気合・間合・残心を学び、十二分に「武（道）の精神」を涵養することが可能なはずだ。

くりかえすが二一世紀の今日、古武術の伝承者たる指導層はその形の正確な伝授と継承者の養成もさることながら、循環的に混沌が支配する日本国を永遠に安定するため

に、真剣形稽古によって涵養される強靭な「**無私の精神**」の活用方法について、至急検討すべきではないだろうか。

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困るもの也。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業を成し得られぬなり（山田済斎編『西郷南洲遺訓』、岩波文庫・ワイド版岩波文庫、一五頁、傍点筆者）

道は天地自然の物にして、人は之を行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給うゆえ、我を愛する心を以って人を愛する也（前掲、『西郷南洲遺訓』、一三頁、傍点筆者）

自他を設けて外部に敵ある事を説くは、これ真の天道なるや否や（前出、『山岡鉄舟剣禅話』、一〇五～一〇六頁、傍点筆者）

西郷隆盛や山岡鉄舟が遺したこの言葉に、「武（道）**の精神**」によって涵養される「無私の精神」と「自他一体の精神」が凝縮されているのではないだろうか。

道標Ⅰ提言Ⅰの日韓「アジア海底鉄道トンネル」で次のように述べた。

［著者略歴］和田憲雄（わだ・のりお）

1948年東京都目黒区に生まれる。68年都立小平高等学校、79年中央大学法学部法律学科卒業。予備校英語科講師を勤めた後、92～96年米国ジョージタウン大学ローセンター・ジョージア大学ロースクール修士課程留学。帰国後、アメリカ国務省SD計画日本国首席監理官、在日カナダ大使館運輸監理官を歴任。現在執筆活動に専念する傍ら、「武（道）の精神」の普及に努める。全日本剣道連盟杖道六段、神道夢想流杖術初目録

道標Ⅲ 歴史教科書問題

2007年5月15日　初版第1刷発行

著　　者……和田憲雄

発 行 者……辻　晋泰

発 行 所……長崎出版株式会社

〒101-0051東京都千代田区神田神保町1-18-1

TEL 03-5283-3752　FAX 03-5281-2401

http://doremifa.net/nagasaki/

印刷製本……モリモト印刷

定価はカバーに表示されています。落丁乱丁がありましたときはお取り替えいたします。

本書の無断転写（コピー）は著作権法上の例外を除き、禁じられています。

©NAGASAKI PUBLISHING, Norio Wada 2007 Printed in Japan